て來た。

上來我々は人生と自然との區別を連りに說いて居いたが、其區別の根本は今謂ふ所の意志の有無に歸するのである。即ち人生は意志ある者の結果として生じた現象で、自然は意志なくして生じた事柄である。然るに若し唯物論に從へば人間の精神作用は凡て物質的身體の作用に外ならぬから、意志なる一の精神作用も亦物質界即自然界を支配する法則を脫するとはない樣に思はれる。然らば如何なる理由によつて意志が他の自然界と異なつて自由であると云へるか或は意志は本來自由ではなく、單に自然界の法則によつて必然的に束縛せられて居るのではないか。是に於て意志に關して自由論即非決定論と必至論即決定論(Indeterminismus, Determinismus)とが對立して居る。而して此問題は單に倫理上の意味を有するのみならず、寧ろ神學上一種の必要を認められたとから一時歐洲學界に於て盛に論ぜられた。然し近世に至つては最早其等神學上の爭論は意味を失つて居るが意志の自由如何に就てはなほ充分一定して居らぬ。概して言へば心理學者、殊に唯物論者と同じく自然科學に重きを置く側では必至論に傾き倫理學者、殊に唯心

論の歸結に近い論斷に從ふ者では何等かの論據で意志の自由を主張する。而して現今多數の學者に從へば自由論と必至論とはたゞ其說の表明法に於て相違があるのみで實際は殆と同一の結論に到着して居る。即ち意志は自由であると云ふのは意志が一切の法則を離れて隨意に變更し得ると云ふ意味ではなく、心內の原因から必然的に生じ來つて外部の事情に左右せられるのみのものでないと云ふとに歸するので、決して自然科學などの法則を無視しやうとはせぬ。たゞ哲學上の論據や其見方の相違によつて多少重きを置く所がちがうのである。然らば我々は如何の立脚地を執るか。此に之を確定する必要はないが哲學一般の傾向として唯心論に傾く所から見れば自由論の名稱を選ぶ方が適當であるやうに思はれる。加之、人生哲學の視點から云へば單に心作用が法則に從て活動すると云ふ點のみならず、其作用が自己の直接に經驗する所で何となく他の自然現象の如く間接に經驗せらるる事柄とは異かうといふ意識に基つくものであるから、自から其必至的方面よりは自由の方面に重きを置くのは當然であらう。たゞ自由と云ふ側を强く言ふと心理學の研究に反對する樣な恐れがあるから、此點だけは務

めて避けなければならぬ、即ち此に人生哲學第二の問題は如何なる意味に於て意志を自由なりと云ふべきかと云ふことになつた。

さて意志を自由なりと論定したならば此に始めて意志の顯れた行爲に就て是非の批評を下すことに意味が出て來る。單に我が認識するのみならず其意志を用ゐて自ら作出した人生ならば、之に就て「かくあつたらばよからう」と云ふ註文をなすことは當然である、即ち第三に人生の理想に就て充分論議する餘地が生ずるのである。通常所謂倫理問題は即ち是である。

人生の理想即道德を論ずるに當つて二ッの方法がある。一は豫め或標準を定めて之によつて行爲の價値を定める方法で、此場合には人生は正邪の二範疇中に包括ぜられる。然るに此標準自身が必しも永久不易ではないと云ふ事實を發見すれば、人は其正邪をして正邪たらしむる一層深い根據を探らうとする。是に於て第二の方法が生ずるので、即ち人生の目的に適ふと否とによつて行爲を評價するのである。換言すれば、人の行爲は相集まつて人生をなすものであるから、其各行爲は人生の全體を作るに耻ぢざるものでなければならぬと云ふことを考へて、行爲を判定するのである。此場合には凡ての行爲は單に正邪と名つくべきものでない。何者、別に何時も定まつた標準はないから、標準に合すると云ふ意味の正と云ふ概念は此場合にはあてはまらぬからである。それで又かゝる場合には美醜の範疇もあてはまらぬ、何者、美とはたゞ觀ずるものに就て名つくべき語で、意志の自由が存する所には用ゐられ難いからである。それで此場合には善惡の範疇が最適當であらうと思ふ。何者、善とは意志を有して若しくは有すと假想して、或目的に適ふ場合に一般に名つくるものであるから、行爲が人生の目的に適ふと云ふことを顯すに最適當であるからである。斯樣にして人生の理想に關して二樣の方面が區別せられる、即ち一は法則觀て一は目的觀である、一を名つけて形式的見解といひ、一を實質的見解とも云へる。

古來人生問題に關して種々異說の起つたのは一は是等法則及目的の意味に就て異解があつたからであるが、又此兩方面を混同したからである。是等兩方面は何れも缺くべからざるものであつて、形式的法則のみを以て人生を律すれば停滯を來し、實質的方面は常に何等か其時に相當した法則を作つて其規律を定めるの

てある。然るに形式論のみを以て人生問題を定めやうとする者は往々見る所であつて、又實質のみに重きを置いて所謂道德の變化のみを認めるものも少なくないが、共に一面を見たものである。道德は人生の目的によつて定まる故に其實質は其目的を達する爲に絶えず變化するが、其一般形式なるものは人生其者が主觀的統一を得て認識せられる限り勝手氣儘に變化すべきものではない。故に此點に於て我々は先づ古來の偏頗なる見解を調和したいと思ふのである。

更に形式論と實質論との詳細に入れば、種々の異說に遭遇するが、先づ大體に於て形式論には外律論と內律論(他律と自律(Heteronomie; Heteronomy; Autonomie; Autonomy))との二に分ける。前者は標準が外部(例へは風俗習慣の如き)から定められるとするもので、後者は內部(即ち人の良心)に標準が自から定まつて居ると云ふものである、道德の論としては後者の方が一層進んだ說明と看做されて居るが、然し實際上やはり其內部的法則も外部的法則の體を具へて始めて眞に効力を有するのであるとも看過してはならぬ。而して其所謂內律論にも種々の別があるが其說明が完全に近つけば、其內律が人生全體の目的を代表するものと解せらるゝに至るのであるから、是に於て形

式論が終に實質論に入ることになる。

實質論は人の本性に關する解釋によつて異なつて行くが、大體に於て知に重きを置くものと情に重きを置く者との二に分れる。知に重きを置くと云ふよりは寧ろ感情の滿足即ち快樂を求める者である。是れ所謂快樂主義と嚴肅主義と(Hedonismus; Hedonism; Rigorismus; Rigorism)の爭論の點であるが、此二論は共に人性に關する解釋を誤まり、自我の本質を知若しくは情の一部と見たによつて生ずるので、若し自我は知情意全體の統一なることを知れば是等兩論の各偏頗なることを解し得るであらう。且つ其のみならず、快樂主義にして屢唯物論と結托し、嚴肅主義にして唯心論に關聯するものが多いので哲學上また其點に關して適當なる解釋を圖らなければならぬ。

以上の他各論に就てそれ〴〵詳細なる論議もあるが、こゝにはたゞ一般哲學上の立脚地と關係ある點のみを併列して哲學諸問題の終結點を示した。

本講は此最後の章に就て一々論究する積であつたが種々の障碍などの爲に挫取らず、終にたゞ問題のみを掲げて暗に解釋法を示すに止めた。なほ此點に就ては「哲學

62
397

概論」などを參照したならば幾分か得る所があると思ふ。且つ哲學の大意を說く場合には以上の如き序說でも其目的を達するに於ては大なる遺憾はないと信ずる。

哲學綱要終

終